日記が語る地震直後の東京：鹿島龍蔵と関東大震災

On the people’s life at Tokyo after the 1923 Great Kanto Earthquake described in a diary by Tatsuzo Kajima

武村 雅之 [1]
Masayuki Takemura[1]

[1] 鹿島・小堀研
[1] Kobori Res. Comp., Kajima Corp.

僕の尊敬する所は鹿島さんの「人となり」なり。鹿島さんの如く、熟して敗れざる底の東京人は今日既に見るべからず。明日は更に稀なるべし [芥川龍之介著「田端人」（大正 14 年）]。このように芥川に慕われた鹿島龍蔵は、大正から昭和初期にかけて現在の東京都北区田端のいわゆる「田端文士村」に住み、文士や美術人の間で活躍した。龍蔵は一方で、鹿島組（現在の鹿島建設株式会社）の組長であった鹿島精一の義弟で、鹿島組の理事長を勤める実業家でもあった。明治 13(1880) 年生まれで震災当時数え年 44 歳。地震発生当日の大正 12(1923) 年 9 月 1 日から 8 日までの様子を「天災日記」として書き残している。龍蔵の日記から見える震災直後の東京の様子を、救援、復旧、流言の 3 点からまとめて見た。

龍蔵の家に避難してきた人は、2 日の夕方には総勢 200 人に達した。知人は屋内に、知らない人は戸外を原則とした。龍蔵の家には米 2 俵の買い置きがあり、また地震直後に、副食物や蝋燭や炭の買い入れをし、水は風呂に汲み込んだが、この避難者の数では数日しかもたない。4 日早朝に所澤へ食料の援助を頼み、また 4 日の夕刻には、千住出張所に米若干と石油の援助を頼んでいる。3 日に銀行で金を引きだそうとしたが叶わず、水戸からの救援者に 150 円、7 日に千住出張所から 100 円をそれぞれ借りている。9 月 7 日の夜になって、各戸における避難者の人数を調べさせ白米の供給券が役所から配布された。米は高臺組合が配給所へ一括して取りに行き、供給券に応じて各戸に分けられた。内訳は 1 人前一日 1 合で、家族も避難者も同じで、足りない場合は玄米を 1 合 5 銭の割合で買うことになっていた。救済はすべて共助を前提としたものであった。

生活の復旧は着実に進んだ。5 日ごろから、避難者で退去するものが増えてくる。東京日々、報知、都などが、夕方から小判 1 枚 4 頁の新聞を出した。東京駅前の中央郵便局で電報を取り扱うようになった。6 日には、近くの動坂、池之端間の電車運転が再開し、夜には周辺で電燈がつく。7 日になると、田端、日暮里は東京の玄関口となっていたため、群集山の如くで行列数町に及ぶ。郵便が再開され、近所に臨時郵便事務取扱所ができる。8 日現在で龍蔵宅はほとんど旧態に復していたが、問題は電気（昼間線）が来ないのでモーターで水を汲むことができない。ガスや電話が開通しない。そんな中で糞尿問題には相当困ったようである。

最後に流言飛語の様子と戒厳令の影響を見ると、1 日夜、火災の最中に聞こえた爆発音が、翌朝、朝鮮人の爆弾によるとの風説になった。2 日の夕刻、野邊地慶三宅を見舞うと、品行の悪い朝鮮人が暴動を起こしている、火事もそのためで、今、現に近くの動坂で焼き討ちを行いつつあるとの噂を聞く。避難民たちが、動坂に火が起こってこの方面に燃えてくるという流言に惑わされて騒ぎ出す。ちょうどそこへ、騎兵一大隊が門前の道路を蹄鉄の音高く通過する。今にも戦争が始まりそうな雰囲気に、たまらず群集の騒ぎが頂点に達した。龍蔵の計らいで一旦騒ぎはおさまったが、午前 3 時には遂に、尾久を追われた徒 300 人が一大集団となって来襲するということで、高臺組合の男子総出動で警鐘を乱打するまでになった。3 日になってもこの状況は続き、朝鮮人暴動に関するさまざまな流言蛮語が飛び交う。田端でも芥川など若者が中心になって自警団が結成された。政府は 9 月 2 日の夕刻近くに、東京市と府下 5 郡に、戒厳令の一部施行を実施した。陸軍は、戒厳令が下ると、騎兵をして施行地域を駆けめぐらせ、軍隊の到着を住民に知らせた。戒厳令の施行によって、人々は安堵した反面、流言がますます真実味をもつ結果にもなった。5 日に龍蔵が京橋の本店跡に向う途中、御徒町付近の路上に不逞な朝鮮人であると言って殺害された死骸が放棄されているのを目撃、6 日に今戸の建具屋が来て、朝鮮人を殺した話を自慢げに話しているのを苦々しく思ったとも書かれている。

一般人の日記はまさに血の通った「震災誌」であり、今後の地震への対応を考える上で参考になることが多い。

（文献） 武村雅之、2008、天才日記：鹿島龍蔵と関東大震災、鹿島出版会、全 302 頁